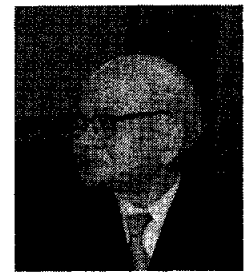
西欧文化と日本文化の融和

汎神論的自然観から日本的アニミズムへの道

井手　賁夫



いで　あやお
1910年生まれ。
慶應義塾大学文学部（独語独文専攻）卒業。遞信省遞信博物館、東海大学教授をへて、北海道大学教授、北海道薬科大学、北星学園大学教授を歴任。現在、北海道大学名誉教授、日本ヘルマンヘッセ協会長など。
著訳書に『ヘルマンヘッセ研究』、ヘッセ書簡集『愛・心・自然』など。

西欧文化と日本文化との違いは大まかにいえばキリスト教文化と仏教文化の違いといってよいであろう。キリスト教文化のような一神教は、砂漠地帯の中に生れるといわれ、仏教文化のような多神教文化は森林地帯に生れるといわれる。今日の仏教文化にはキリスト教の影響もあって一神教的傾向も出ているようである。いずれにしても、スピノーザによって完成された汎神論がこの中間にあって、西欧文化を東洋文化へ近づける重大な契機になっている、それはまた自然保護の基本概念につながる。

スピノーザ（一六三二―一六七七）の汎神論は一六七五年に書き上げられたエティカに述べられているが、そこに述べられている神の思考は次の通りである。

キリスト教の神は造物主として被造物である世界を超越した存在と考えられている。すなわち神は世界を超越することによって世界と対立している。その意味で神と世界は一種相対的なもので、従って神は絶対的なものとはならない。神が絶対的なものとなるには、世界と対立するものであってはならない。そこでスピノーザは「神はあらゆるものの内在的原因であって、超越的原因ではない。」（定理一八）という。神はキリスト教の神のように世界に超越し、対立する超越神ではなく、内在神となる。スピノーザの神は内在神であることによって、世界と対立するという相対性をまぬがれるのである。こうして「神は唯一のものであること、いいかえれば、自然のうちには唯一の実体しか存在しない」（定理一四）というとき、自然のうちのあらゆる有限者はこの実体のうちに存在することになる。こうして、神あるいは実体の唯一性、絶対性は、自然と神との同一性に行きつくことになる。即ち唯神論あるいはキリスト教の哲学では自然は被造物であり、超自然と対立したが、スピノーザに於ては超自然は存在せず、自然のみが存在することになり、自然＝実体＝神の等式が成り立ち、神即自然という彼の哲学の特徴をあらわす言葉が生れるのである。（註1）

こういう考え方に対して、上智大学のインモース教授はカソリックの立場から、神と世界の一致あるいは分離を説くには一元論または二元論を持ち出しては、あまりに単純で現実にそぐわない。存在の類推という理念が根本的な解決であって、神と世界とは一致するのではなく、存在という概念は類推の意味で用いられる。すなわち世界は創造者の理念の表現であり、写し絵である。従って神は超越性と内在性の類推の意味においてその中に内在している、とするのである。神はあらゆる事物の中へ生成の芽をおいておいたので、それは物質の中で精神的原理として働き、進化を制御する。このことは五世紀にピッポのアウグスチヌスがすでに述べていたが、自然科学者であり、神学者でもあったテイヤール・ド・ゥ・シャルダンがこの考えを新しく形成したという。

所で「エティカ」は彼を敬愛する友人たちの手で「遺稿集」の中におさめられて、スピノーザの死んだ一六七七年にラテン語版が、翌七八年にオランダ語版が出版された。しかし一六七八年六月キリスト教神学者と官憲はこの遺稿集を禁書にしてしまった。しかし汎神論的思考では彼の先輩ともいうべきジョルダノ・ブルーノ（一五四八―一六〇〇）が諸国周遊から帰って来た後裏切りによって宗教裁判にかけられ、七年間の禁固の後ローマで処刑された事実や、トマス・カンパネラ（一五六八―一六三九）が二七年間牢獄に幽閉されていたことに比べれば、その書物が死後に出版されたにせよ、ヨーロッパの他

のどの国よりも寛容であったオランダの特殊性があったとはいえ、多くの彼を敬愛する友人達に囲まれていたことは彼の幸せであったというべきであろう。

このようにスピノーザの考えを無神論とし、異教として弾圧した教会に対して、レッシング、ヘルダー、ゲーテ等はこれに反論した。殊に既にジョルダノ・ブルーノー、カンパネラ等を読んでいたゲーテはスピノーザの論旨に深い感銘を受けて、同じくスピノーザを弁護したレッシングを訪ねようとしたが、折柄レッシングの死の知らせを受けて果たせなかったことは残念なことである。ゲーテとレッシングとが相会していたら大きな歴史的展開が起ったかもしれない。後にゲーテはシュタイン夫人と共にエティカを研究した。また夫人と共に顕微鏡をのぞき、人体の解剖、植物学、天文、地文の研究を行なった。かつてはスピノーザの崇拝者であり、研究者でもあり、スピノーザを通じてゲーテとも知りあったヤコビが、エティカを読んでスピノーザを無神論者であると難じて、スピノーザから離れたとき、ゲーテは彼を評して、形而上学に煩わされたためであると考え、それに対して自分は物理学によって祝福されていると喜んで、一茎の草、一塊の石にも神が認められると感じたのである。じつに彼は石たると木たるとを問わず、万物すべての相互作用を感じていた。そしてスピノーザこそ「最高の有神論者、最高のキリスト者」と見なしているのである。

ゲーテは一七八三年、三四才のとき「自然」という論文を書いているが、ゲーテの心眼に映った自然は、いわば生と死を両極とする振り子運動を行なっている。少年の昔に蝶の死骸を見て、蝶の本体はこれだけではない。何かがほかにあるとして思いを潜めた「生」を原級とすれば「自然」の思想は比較級への発展だといえよう。一八二八年ゲーテ七九才のとき、時の宰相フォン・ミュラーに宛てて認めた自註の中で「それにはまだ最上級が欠けている。そして最上級とは物質に関しての両極性と精神に関しての上昇のことだ」と述べている。更に言葉をついで「しかし物質は精神なしには、精神は物質なしには決して存在しないし、力を発揮することはできないから、物質も上昇できるわけだし、精神も負けずに引き付けたり、突き離したりするのである。」（註2）と述べている。

以上のゲーテの言葉は、ニュアンスこそ異なるがヘッセの物の中に「たましい」を見るところとほとんど同じ趣がある。ゲーテを絶えず学んでいたヘッセがゲーテの以上の言葉を読んでいたかどうかは分からないが、ヘッセは近代の進化論の上にその思想を打ち立てているとはいえ、畢意ゲーテの言葉を異なった表現で裏付けたともいえよう。そして「物質も上昇できるのだし」というゲーテの言葉は、物から生物への上昇を思わせる。

ゲーテはイタリア旅行の際パードゥウァの大植物園を訪れた。そこでヤシ科の植物に興味を覚えた。その扇の形をしたヤシには地面に近い単純な槍状の葉から上部のへら状の束に至るまで一連の完全な展開の姿を認めることができた。へら状の束からは花の小枝が出ていたが、奇妙なことにそこまでの成長とは関連がなかった。形態がこのように複雑につながりながら移り変わっていくのを観察してゲーテは植物のメタモルフォーゼ（変態）という彼の学説のインスピレーションを得たのである。即座に彼は長年にわたる植物との交際を通じておのれの心の中に蓄積していたものがなんであるかを悟った。すなわちその扇形のヤシの木のすべての側生の枝は葉の変容にすぎないという明確な、生きた証拠を示していたのである。ゲーテは一つの器官が増殖して別の器官となることは単に変容の一過程にすぎない、と理解した。すべての器官は、類似性から非類似性へ外見上変わったように見えようとも、実質は内的同一性を有していることがわかったのである。（註3）

そのヤシの木は、その後の幾多の戦争や革命にもかかわらず現在もパードゥウァの植物園に健在の由である。

ゲーテは植物のあらゆる外面的特徴の可見性という現象の奥にもっと深い本性があると考えた。この着想はゲーテの心の中でいよいよ生き生きとして来て、すべての植物がたった一つの植物から発展することができるかもしれないと考えた。この考えと共に展開という考えが生れたのである。この当時としてはだれにも注目されなかった一種の奇想が、植物界のみならず世界の考え全体を一変させる運命を担っていたのである。つまりこの考えと共に進化という考えが生れたからである。ゲーテはこういっている。

「私は長い間、植物形態の変容の独特な変異を追求してきたが、そうした形態変異は私のうちに益々次のような考えを目覚めさせてくれた。私たちの周囲に見られる植物の諸形態はあらかじめ決定されているものではなく、幸いにも順応性と融通性を持ったものであり、世界中到る所、様々な条件が形態に影響を与えても、そうした諸条件に適応することができ、それらの諸条件に合わせて形成されたり、形成し直されたりする能力があると。」（註4）

ゲーテは「植物の変態について」という最初の小論文に自分の考えをまとめて、これを何部も友人たちに送った。しかしだれも気のきいた批評などできる筈もなかった。ゲーテがシラーにこれを説明した

とき、シラーは大変興味を持ち、適格な理解を示しながら耳を傾けゲーテを見つめていたが、ゲーテの説明が終わると「それは経験ではない、理念です。」といった。ゲーテはあっけにとられ、いらだつ心を押えながら反論した。「経験もしないのに理念を得て、しかもそれらが自分の目の前に見えるなんて、何て素晴らしいことだ。」（註5）

このようにゲーテの偉大な仕事は同僚達にはほとんど評価されず、後世に至って初めてその真価が認められたのである。偉大な生物学者のエルンスト・ヘッケルはゲーテをジャン・ラマルクと並ぶ者と見なし、「生物進化論を確立した偉大な自然哲学者たち、またダーヴィンの仲間の著名な研究者である偉大な自然哲学者たち、彼らみんなの先頭に立つ者」と激賞している。（註6）

植物の能力についてのその後の研究は「植物の神秘生活」という書が実に多くの驚くべき報告を与えてくれる。例えば、植物は方位や未来に対してさえも知覚力を持っている。ミシシッピー渓谷の大草原のヒマワリの一種の葉はみな羅針盤の方位を正確にさしていたという。トウアズキはあらゆる種類の電気と磁気の影響にきわめて敏感なので、天気予報植物として利用される。ロンドンの旧王立植物園で初めてこれを実験した植物学者たちはこの植物を用いて温帯性低気圧（オイクロン）、ハリケーン、旋風、地震、さらに火山噴火を予報する方法を見つけた。（註7）外界に対してこのように確実に、敏速に、さまざまに反応する植物は外界との何らかの通信手段をもっている筈で、ウィーンの生物学者ラウール・フランセは、それは我々人間の感覚に優るとも劣らないものである、という。彼によれば、植物は人間が何も知らないできごとや現象を絶えず観察し記録しているのである。今日の研究では、植物は人間の耳には聞こえない音や、目には見えない赤外線や紫外線のような色波長を識別する能力をもっていることが知られている。X線やテレビの高周波には植物は特に敏感なのである。（註8）

以上のように植物の驚くべき性能については限りなく多くの実例が提出されているが、なおふたつほど驚くべきことを伝えておく。

ひとつはクリーブ・バックスターという米国の嘘発見器検査官の第一人者が、嘘に敏感に反応することを発見した事実である。

彼は電気検流計をフィロデンドロンというサトイモ科の観葉植物につなぎ、それからある雑誌記者に、一九二一年から一九三一年までの年号を順にあげて言い、その中にその記者の誕生の年が含まれているにもかかわらず、すべての年に対して「いいえ」と答えさせた。しかし観葉植物につながれた計器は記者の生まれた年の「いいえ」という否定に対して特別に高い曲線模様でその「いいえ」が虚偽であることを示したのである。

こうした現代の科学的証明とは別に、浪漫派の詩人達には一種の擬人法、あるいは感情移入で、ノヴァーリスの「青い花」のように、その花を見つければ、動植物すべての言葉を理解し得るという考えがあるし、シューマンの名作「くるみの樹」などもそのよい例である。作詩者はユーリウス・モーザーという余り知られない詩人だが、その詩の内容はくるみの花が近くの娘さんの噂をしていて、彼女がやがてよい花婿を得て結婚するだろう、と話し合っているが、娘は葉ずれの音を聞きながら何故とも知らず心楽しく寝入る、というのである。

モーザーがノヴァーリスの影響を受けたことは当然であるが、ひょっとすると植物の持つ上例のような玄妙な力をどこからか聞き知っていたかもしれない。というのは、すでにアリストテレスは植物には魂があるが感覚はない、と説いていて、この教説は中世を経て一八世紀まで続いていたそうだし、カール・フォン・リンネ（一七〇七―一七七八）は植物が動物や人間と違うのは植物にはただ運動が欠けているだけである、と説いているから、モーザーがそういう話を聞いていたということはあり得るかもしれない。いずれにしてもこうした考え方乃至感じ方にはスピノーザの影響が考えられる。

平安朝頃の言葉だそうだが日本仏教に「草木国土悉皆成仏」というのがあって、あるインド哲学者の説明によると、「これは人間と自然環境とが一体不二であり、森羅万象がすべて絶対者のあらわれであるという世界観で、『これを東洋哲学の神髄と呼んで差支えない。』」という。

この限りではスピノーザの汎神論と日本仏教の精神とが殆ど一致しているように見える。尤も仏教も元来は多神教であったものが、キリスト教、ユダヤ教など一神教の影響で一神教に近づいたようであるが、なお汎神論的面が多くあるように思える。

所でキリスト教では人間だけが神の似姿をうけて特別な恩寵に浴していて、他の動物は全く人間のために作られたものという考えが支配的であって、この考え方に疑問を抱いたアルバート・シュヴァイツァー博士がこの問題について宗教上の文献を調べたが、彼以前にはだれ一人としてこの問題に触れた人がいなかったことを発見した。せいぜい非常に遠回しに疑問を表明しているにすぎなかった。その後アフリカで原野をかける馬の姿を見て、再びこの問題を強く考えたシュヴァイツァーは「新しき生命の倫理」

という文章の中で、神の前にはいっさいの生物は平等で、人間だけが特別な存在ではない、ということを書いている。最近では自然保護、環境保全思想の発達につれて、こうした考えもはるかに一般に知れわたって来てはいるが、宗教的伝統というものは決して容易に変わるものではない。地球が太陽のまわりをまわっている、というガリレオの言葉が、地球を中心に宇宙が回転している、という従来のキリスト教派の考えを公式に改めさせ得たのはつい最近のことである。教皇がガリレオの言葉を承認するには、ガリレオの考えの正しさをすべてのキリスト教者に納得させても、キリスト教学がそれに耐え得る時まで待たねばならなかったのであろう。ゲーテがすでにその先駆者であった進化論は現在でもアメリカでもヨーロッパでも場所によっては禁ぜられているところがある。ヘッセの「デミアン」が進化論の上に立って記述されている、と私がかつて書いた時、ヘッセはそんな唯物論者ではない、という反論にあったことがある。人間も動物も神の前では平等である、ということも、シュヴァイツァーであればこそ、キリスト者としてもいい得たのであろう。

ヘッセは若い時からゲーテを深く研究していたが、彼の家庭の敬虔なキリスト教の伝統的教育の中で、その過敏な性質のために善悪の問題に苦しんだが、第一次大戦の苦難を経てようやく進化論の上に彼独自の新たな世界観を樹立した。このことについては既に私は幾度か説明をしているので細かいことは省略するが、今日の自然科学からすると、生命の起源は蛋白質よりさらに分子原子の世界にまでさかのぼっている。従って精神の起源も少なくともその萌芽はそこまでさかのぼることになる。その萌芽が進化の発達の段階の中で精神の活動となってあらわれる。ヘッセはこうした発展の原動力を「たましい」と名づけている。それは生命の中に内在する最も根源的な生命の促しであり、ユングのいう原型に相当するものといってよいであろう。それはまたスピノーザのいう根元的原生命でもある。従ってヘッセによれば「たましい」は到る所にある。詩人クリスチャン・ヴァーグナーの八〇才の誕生を祝った三八才のヘッセは公開の手紙の中でこう言っている。

「あなたは動物と石の中に近しい、愛する『たましい』を見出すのです。」（註10）

また「想像」という文章の中で「魚や鳥や猿の段階から現代の武力動物としての人間にまで進化してきた長い道程に於て、すなわち我々が長い時の経験と共に、ついには真の人間、もしくは神になろうとして進んでいる長い道程」（註11）の結果として我々は現在の「たましい」を所有しているのである。従ってこの「たましい」は長い進化の過程の中で現在の我々の持つ理性的な「たましい」にまで発展してきたものであるが、しかし生命の発展の「根元的な促し」としての「たましい」は到る所にあり、到る所に芽生え、到る所に予感され、求められることになるのである。殊に注目すべきことは、さきにクリスチャン・ヴァーグナーへの手紙の中で「動物と石」と述べていることである。それは既に述べた如く、ヘッセがあらゆるものの中に、すなわち動物から物に至るまでのあらゆるものの中に、「たましい」を見ているということである。そしてこの点でヘッセはまたさきに紹介したゲーテの「物質は精神なしには、精神は物質なしには決して存在しないし、力を発揮することはできない」という言葉を思い起こさせる。しかし一般のヨーロッパの人達は生物である動植物まではある程度の心の働きを認め得るとしても物にまで認めようとはしない。日本人にとっても一般的には少なからず常識はずれであろう。しかしヘッセはクリスチャン・ヴァーグナーへの手紙の中で言っているように、「動物と石の中に、近しい、愛するたましい」を見出しているのである。しかしこういうことが一般にはどんなに理解しにくいかということをよく心得ていて、後年の名作「シッダルタ」の中で大変分かりやすい説明をしている。

「これは一つの石である。それは一定の時間がたてば怖らく土になるだろう。そして土からは植物が生ずるだろう。もしくは動物又は人間が。」（註12）

しかしこの説明が余りにも合理的で説明的であるだけにヘッセは更にこうつけ足さなくてはならない。

「さて昔なら私はこういったろう。『それは迷妄（マーヤー）の世界に属する。しかしそれは変化流転の間に、あるいは人となり、霊となるかもしれない。それ故に私はこの石にも価値を認めるのだ。』と。昔なら私はそう考えたろう。しかし今は私はこう考える。『この石は石である。それはまた動物でもある。神でもある。仏陀でもある。私がこれを敬い愛するのは、これらがいつかそれらのものになるかも知れないためではなく、これがずっと以前から、そしてつねに、それらのすべてであるからだ。―さらにまたそれが石であり、現在、今日、それが私の目に石と見えるというその故にこそ、私はそれを愛するのだ。』（註12）

ベンガル生まれのチャンドラ・ボース博士は一九〇〇年パリ博覧会で行われた国際物理学会で「無機物と生物に関して電気により生み出される分子現象の共通性」と題する講演の中で、「自然の多様性のように見えるものの間の基本的統一性」を強調し、「物理現象はここで終わり、ここから生理現象が始

まる、と線を引いたり、断言したりすることは困難である」という結論を述べた。生物と無生物の間の深い溝は一般に信じられているほど広いものでも、架橋できないものでもないであろう、というボースの驚天動地の提案に、大会は「大混乱」となり、書記は「茫然自失」したということである。

ボースの研究発表は様々な敵意や反対を招いた。物理学から出発したボースが、生物学の領域へ入ったということが、第一の反対理由であった。しかし結局ボースはこれらの反対をすべて克服した。

一九〇一年五月一〇日、ロンドンの王立研究所の「金曜講演会の夕」で、ボースは四年以上にわたって得られた実験結果をすべてきちんと整理して示し、それらの一つ一つを実験で実記し、最後にこういった。

「私は今晩みなさんに生物と無生物における応力と歪みの歴史の自記記録をいろいろお見せしました。それらの線は何と似ていることでしょう。実際、余りにもよく似ているので、どれがどちらか分らないほどです。こういう現象の中で境界線を引き、ここで物理現象が終り、そこから生理現象が始まるなど、どうしていえるでしょうか。そんな絶対的境界線はないのです。

これらの自記記録の無言の証言に出会うとき、私はそれらの中に万物に浸透しているある統一性―光のさざ波の中に震えている塵埃、私たちの地球上にうようよいる生き物たち、私たちの頭上に輝いている多数の星たちといった万物をそのうちに担っている統一性―の一つの相に気づいたのです。その時初めて、私の先祖が三千年前にガンジス河のほとりで宣言されたあのお告げの意味が、ほんの少しわかるようになりました。そのお告げとは、次のような言葉です。『すべてこの宇宙の変化する多様性の中に一のみを看取する者たち、この者達にのみ永遠の真理は帰属し、余の何人にも、他の何人にも帰属することなし！』

ボースの講演が終ったとき、今度は彼の見解に対しだれも挑戦をいどむものはいなかった。

一九一七年ボースにナイトの爵位が贈られた。同じ年バーナード・ショーはその全作品をボースに献呈した。一九二七年にはロマン・ロランが「ジャン・クリストフ」をボースに献呈した。

スピノーザの汎神論が一切万物に神の顕現を見るということは、即ち「生命の力として神を見る」（註14）ことであって、物の中にまでヘッセのいう「たましい」を見るということとほとんど一致していると思われる。この汎神論を無心論と罵る教会派に反駁したゲーテには、前述のようにまさしくヘッセの思想の先駆を見ることができる。それはともかくヘッセがあそこまで説明しているということはスピノーザ、ゲーテ、ヘッセがすでにいかに東洋精神の中に入って来ていたか、ということである。

しかしこうした汎神論的な考えや進化論は現在なおヨーロッパでは一般には必ずしも正しく理解せられていない。それはヘッセのそうした考えを論じた私の文章がその部分だけ脱落させられたり、あるいは歪められて発表されたという事実があるからで、ソフィア大学のインモース教授は私の質問に対して、それは汎神論のせいだ、といって来た。

日本人は昔から大木にしめなわをかけたり、庖丁塚とか針供養とか、物に対してもいわゆるアニミズム（精霊崇拝）的要素が濃い。そしてこのことは物の中にも精神を認めようとするゲーテやヘッセの考えと殆ど同じといってよいであろう。そしてここに私は西欧思想の東洋思想への真の理解と融和の可能性を見たいと思う。しかし現状では上述の通り、一般的にはなお必ずしも容易ではないであろう。

ヘッセは第一次、第二次大戦を通じて、「西欧の没落」を感じていた。そして新たな希望を東洋の文化の中に見出そうとした。ヘッセはまさしく東洋の精神に近づきそれを理解した。しかしそれは一般的にはなお必ずしも容易ではない。国際的な宗教会議もひらかれてはいても、互いの信仰を是認しあうとしても、真の融和和合は決して容易ではないであろう。ただ今日の地球的危機は歴史的風土の重要性と日本的「自然生命的存在論」の認識に於てのみ克服し得るという考えのあることを披露すると共に、今日の一般の日本人のそれについての反省が高まりつつあるとしても、今はその重要性と必要を指摘するに止めたいと思う。

＜註＞

(1) 工藤喜作「スピノザ」一一三頁―一一四頁、清水書院。

(2) 丸山武夫「ゲーテ」。「近代抒情詩の展開」七〇頁五行以下、同学社。
Goethe : Hamburgische Ausgabe Band XIII. Erläuterung zu dem aphoristischen Aufsatz ＜Die Natur＞S. 48.

(3) Goethe : Band XIII. Der Verfasser teilt die Geschichte seiner botanischen Studie mit. S. 163.

(4) ibid.

(5) Goethe : Band XII. Autobiographische Einzelheiten ; Glückliches Ereignis. S. 540.

(6) Peter Tompkins & Christopher Bird : The Secret Life of Plants. S. 109.
荒井昭広訳「植物の神秘生活」一八五頁、工作舎刊。
(7) ibid. S. 13.
訳書二二頁。
(8) ibid. S. 14.
訳書二三頁。
(9) ibid. S. 8.
訳書八頁。
(10) Hesse : Gesammelte Briefe, 1 : an Christian Wagner S. 279.
(11) Hesse : Gesammelte Schriften, 7 : <Phantasien> S. 152.
(12) Hesse : G. S, 3 : <Siddhartha> S. 726.
(13) <The Secret Life of Plants> S. 87.
訳書一五三頁。
(14) ibid.

<あとがき>

この原稿を独文に直して国際ヘルマン・ヘッセ・コロキアムのDr. Martin Pfeifer、日本学のProf. Dr. Slawik (Dr. Kleinerの恩師)、Prof. Dr. Koester (University of Nevada)、Prof. Dr. Kursche (Universität München) 等に送ったところ、いずれも深い関心と興味とを示したが、Dr. Pfeiferは更に、得る所があった。公表されたらその誌名を知らせてほしい、公示するといって来た。殊にKurscheは「非常な興味と讃意とを以て読んだ。実際私には、あなたは日本人としてドイツ文学の作品及び我々の歴史的伝統の中に於ける汎神論の最も重要な特質を我々よりもより明らかに認識し得るように思われる。この点に外国文化の文学研究の大きな利得がある。『外のまなざし』は『内なるまなざし』とは異なることが示されると共に、しばしばより多くを示す、ということである。」といって来た。なお今後も数名の知人に順次送ることを考えている。

ズールカンプの編集者Dr.フォルカー・ミヒェルスのたより

井手さん、お便りと、多くの人には対立的に見えるかも知れない見かけの多様性にもかかわらず自然の持つ基本的な統一に関する見事な論文をありがとう存じます。私は何故人間だけが（自己中心的な思いあがりで）「創造物の王冠」と見なされてあらゆる他の無機及び有機的自然が、人が利用し得る程度に応じてのみ尊重され得るということを正しく理解できないでいました。植物、昆虫及びその他の動物は我々人間の感覚では感じ得ないことを知覚することができるのです。彼らは怖らくややより複雑なできで、より複合的な人間とは違った構造を持ち、従って人間に劣らず完全に作られているのです。ところが人間は他の現象形態に対して人間の疑問の多い優越さをしばしばこの上なく邪悪に悪用しているのです。こうしてあなたは私達に謙遜と驚嘆とを教えることのできる重要な認識の道を辿っていられるわけです。ご機嫌よう。

フォルカー・ミヒェルス

閨秀作家ルイーゼ・リンザーの手紙

一九九一年六月六日ロッカ・ディ・パパ（ローマ近傍）にて

あなたの論文を非常な興味を抱いて拝読しました。私はあなたとゆっくりお話したい。一度ヨーロッパへいらっしゃいますか？

私は大変単純な世界像をもっています。現代の物理学によるもので、それによれば、精神だけが実在する。物質は精神の一つの表現形式にすぎない。ハイゼンベルクはそのことを（凡そ）次のように表現した。物質は精神である。精神が物質として自分を表明するのである。

私は自然と共に生活しています。広大な、自分でしつらえた庭園に。この庭園を私は愛し、この庭園が私を愛していることを私は感じています。何もかも素晴らしく繁茂しています。私にとっていっさいが「神」の現象形式です。生命のないものは存在しないのです。従って神なくては何物も存在しないのです。神こそ本質的な生命（エネルギー）なので、すべての存在するものは神的なのです。

私にとって植物、動物、石は本当に「神的」なのです。私は私の友人オイゲン・ドレヴェアマン（神学者、カトリック祭司、精神療法医、パーデルボルンの大学教授）――一人の知者――の小冊子に序文を書きました。その書物の表題は『動物の不滅性について』といいます。それをあなたに送らせることに到しましょう。私は一冊しか持っていませんので。

（中略）

ともかく私は中国の哲学、道教から多く学びました。同じことを私はヨーロッパの神秘主義から学びとることができるでしょう。お話しすることが沢山あります。

ドイツ文学図書館長ベルンハルト・ツェラー教授のたより

一九九一年四月二三日マールバッハにて

二月一四日付けのお手紙と「日本的アニミズムへ

の道」の論稿に心からお礼を申し上げます。

再びあなたからお手紙をいただき大変嬉しく存じました。そしてあなたの「ヘッセ」著作と「ガラス玉遊戯」の翻訳の出版をお祝いします。また日本ヘッセ協会の設立と発展についてのご報告は非常に興味深いことでした。

「日本的アニミズムへの道」に関するあなたの思想圏と中心的問題に関する多くのご研究を私は関心をもってまた得るところ多く拝見しました。スピノーザの汎神論と仏教的世界との間に、同様にゲーテとヘッセの思想過程及び東ヨーロッパの叡智の教えの間に様々な対立点にもかかわらず、多くの接点が存在しているというお考えには私も賛成です。ヘッセの作品が疑いもなく中国思想によって非常に影響を受けていることはすでにしばしば論ぜられたことです。

あなたの思考で大変興味深いことは、様々な学問部門—哲学や文学のみならず正確な自然科学的部門が引用されていることです。

私が見渡す限りでは、西欧世界で今日この種の問題はもちろん相対的に論ぜられていますが、あれこれの教派的見解に反対するような見解はもはや論ぜられません、あるいは禁ぜられてもいません。（中略）

私の書斎にはあなたがかつてお持ち下さった陶器の鈴を私は今もなお保持しています。これは私にとってあなたのマールバッハへの最初の訪問の友情の懐しい思い出です。

第二回目の便りの中であなたの国際ヘッセ・コロキアムでの論文が何故縮小されたのか私は理解できません。

日本学者、ホルスト・ハミッチュ教授の便り

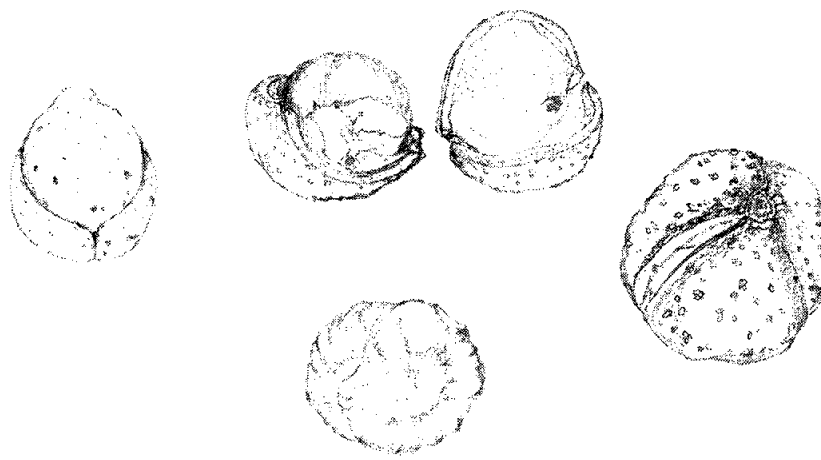
お手紙をありがとうございます。また叙勲のお祝いをありがとうございます（註：勲三等旭日中綬章受賞）。叙勲されたことは大変嬉しく思いました。それは私が認められると共に日本学に対する認知でもありますから。

私についてはまあまあ元気だとお伝えできます。八二才ともなれば人生に期待することは段々謙虚になります。私はこの二、三年来Blasenkrebsを患らっていますが—あなたがあなたの肺気腫と友情を結んだように—私もこのがんと友情を結びました。私はこの面では大変日本的になっていると思います。即ち諸行無常です。この原則を持てば気らくに生きられます。

あなたが学問的にまだ活動していられることは嬉しいことです。私も仕事をしております—たとえ以前に比べればゆっくりではありますが—大変勤勉に。一つは俳論に。俳句文学の背景を明らかにすることが私には大変重要なことに思われます。他方では私の特に好きな新古今集の翻訳に。その一方大いに旅行をしています。ヨーロッパで、ドイツ国内でも。私は人々が自分の祖国のことをどんなに知らないかに、いつも繰り返し驚いています。

あなたの「…日本的アニミズムへの道」を大変興味深く拝見しました。この種の観察は一般に多くの共通の関心の道を開き得ると思います。文化というものは常に全体的に観察せられるべきであろう、と思います。「日本は経済活動のみしている」という視角は正しくないと思います。しかし若い人達にとってはこの視野が本質的なことであるように思われます。

ご多祥を本当に、本当に、心から願っています。



トチノキの実